九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芸術の始原としての力 ： 目にみえないものを「現存」へと軽やかに変換する

知足, 美加子
九州大学 ： 教授

https://hdl.handle.net/2324/7172157

出版情報：週間読書人, 2024-01-12. 読書人
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

学術文化

芸術の始原としての力

目にみえないものを「現存」へと軽やかに変換する

知足美加子

蜷川 順子監修／『風のイメージ世界』刊行実行委員会編

風のイメージ世界

Ａ5判・276頁・4400円
三元社
978-4-88303-578-6
TEL.03-5803-4155

みることができないイメージを、芸術は色や形で表現しようとしてきた。みえないものとの交信媒体のひとつが「風」というモチーフである。神仏や宇宙、自然、科学と人間との関係は、固定化されることのないイメージのダイナミズムである。この動的世界観を、芸術における「風の表象」を通じて多角的に現すという本書の着眼点は素晴らしい。本書はコロナ禍（2022年）に開催された国際シンポジウム「風のイメージ世界」の予稿集を発展させたものである。この時期の我々は、命にかかる空気の動きを常に想起していた。本書の登場は、「みえないものの可視化・言語化への潜在的渇望」に対する必然だったのかもしれない。

バーバラ・バート（『風のイコノロジー』の著者）の「プネウマ」への観点は、本書における論考の紐帯となっている。プネウマとは、ギリシャ文化史において風、息、空気、精神や霊感、生命体が宿すエネルギーを表すもので、ヘブライ語の「ルーアハ」に相当する。霊的な「息」という身体性を伴うプネウマのイメージが、西洋宗教絵画に与えた影響は大きい。《受胎告知》を主題にした宗教画には、神とマリアの間にある不可視のバインドが、光の粒子の密やかな流動（風）として描かれている。この音を感じない不思議な風は、蜷川順子がとりあげたキリストの磔刑における腰布や天使の衣にも見受けられる。蜷川は、「神意をもたらす霊は本来気息（プネウマ）だったとする認識を、風に翻る布として案出した」という。倉持充希はキリストの受難と贖いを示唆する風に注目し、重層的な意味と形態をもちうるプネウマを視覚化することは、宗教画家にとって芸術的課題であったと指摘した。信仰の中にある風は恐ろしく厳粛で、一瞬でありながら「永遠」を感じさせるものである。

一方、東洋の仏教美術における風は、対象に内在する「気」を観る者に感じさせる表現（風動表現）として機能すると長岡龍作は述べている。仏の験（しるし）としての風は、人間からの働きかけに超越者が応えるもの（感応）である。彼は仏像に関して「素材と動きが、見えない存在と人間との間を媒介する」という。苦悩する人々と仏の救いの間に、第四の壁を超えて風が現れる。私事になるが、私は彫刻家であり修験者の子孫である。修験には、自然（人畜草木森羅万象）に仏が宿るという考え方がある。経験的にそれは気配という「風」として感受されると私は考えており、長岡の論考に深く共感した。

近代美術について、富岡進一は「怒り、風を求めた」というターナーの風、嵐、蒸気の表象をとりあげ、そこに産業革命に潜む人間の本性（非理性的、非人道的な情念）を見出している。富岡は、ターナーが機械文明へと暴走する人間への黙示録として自然の偉大さを描いたと分析している。ソムヘギ・ゾルタンの論考は、この自然の力の顕現としての「崇高さ」への関心が、次第に都市へと向かう過程を追う。

現代アートの中で、フラッド・イオネスクは風がもつ転換の力を強調する。人工的な霧が鑑賞者の身体を包む作品事例等をあげ、プネウマがイメージを視覚的「再現」から身体的「現存」に変える機能をもつことを明らかにしている。また、地球の大気を公共芸術として扱う作品《パブリック・スモッグ》をとりあげ、風の経験が気付きを起こす手段として機能することに着目する。風というモチーフは「生きている身体の存在を巻き込むものになりうるかどうかを問う機会を与える」というイオネスクの視点は面白い。本書で唯一の実践者となるハシーブ・アフマドは、自らのアートプロジェクト〈風‐卵〉について説明している。古代ギリシャでは、ハゲワシが風の神アイオロスと結ばれて再生する風媒動物と考えられていた。この神話と、科学的な風の再現やサウンドデザインを組み合わせて、風における受精と繁殖のイメージを作品に具現化している。現代アートにおける風もまた、目にみえない存在や命と交信する場にある。

視覚と触覚を行き来しながら、神仏や宇宙、人間存在、命など目にみえないものを「現存」へと軽やかに変換する力。この芸術の始原としての力が、風のイメージ世界に充満することを本書は教えてくれる。（ともたり・みかこ＝九州大学教授・芸術学・彫刻）

★にながわ・じゅんこ＝関西大学名誉教授・西洋美術史。近年の研究対象は、初期ネーデルラント美術・キリスト教図像学・風景表象・建築と色彩。著書に『聖心のイコノロジー』『祈りの形にみる西洋近世』など。

週間読書人2024年1月12日発行